

去ぬる七月十九日の消息同じく三十日に到来す。世間の事は且く之を置く。専ら仏法に逆らふこと法華經第二に云はく「其の人命終して阿鼻獄に入らん」等云云。問うて云はく、其の人とは何等の人を指すや。答へて云はく、次上に云はく「唯我一人のみ能く救護を為す、復教詔すと雖も而も信受せず」と。又云はく「若し人信ぜず」と。又云はく「或は復讐す」と。又云はく「経を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懐かん」と。又第五に云はく「疑ひを生じて信ぜざらん者は即ち当に惡道に墮つべし」と。第八に云はく「若し人有つて、之を輕毀して言はん、汝は狂人ならくのみ。空しく是の行を作して、終に獲る所無けん」等云云。其の人とは此等の人々を指すなり。彼の震旦国の天台大師は南北の十師等を指すなり。此の日本国の傳教大師は六宗の人々と定むるなり。今日蓮は弘法・慈覺・智証等の三大師並びに三階・道綽・善導等を指して其の人と云ふなり。入阿鼻獄とは涅槃の第十九に云はく「仮使一人独り是の獄に墮つるも其の身長大にして八万由延ならん。其の中間に遍満して空処無く、其の身周匝して種々の苦を受く。設ひ多人有りて身亦遍満すとも相妨碍せず」と。同じく三十六に云はく「沈没して阿鼻地獄に在つて、受くる所の身形は縦広八万四千由旬ならん」等云云。普賢經に云はく「方等經を謗じ、是の大惡報応に惡道に墮つべきこと暴雨にも過ぎん。必定して阿鼻地獄なり」等とは入阿鼻獄是なり。

日蓮が云はく、夫日本国は道は七、国は六十八箇国、郡は六百四、郷は万余、長さは三千五百八十七里なり。人数は四十五億八万九千六百五十九人、或は云はく、四十九億九万四千八百二十八人なり。寺は一万一千三十七所、社は三千一百三十二社なりと。今法華經の入阿鼻獄とは此等の人々を指すなり。問うて云はく、衆生に於て惡人・善人の二類有り。生処も又善惡の二道有るべし。何ぞ日本国の一切衆生一同に入阿鼻獄の者と定むるや。答へて云はく、人数多しと雖も業を造ること是一なり。故に同じく阿鼻獄と定むるなり。疑つて云はく、日本国の一切衆生の中、或は善人或は惡人あり。善人とは五戒・十戒乃至二百五十戒等なり。惡人とは殺生・偷盜乃至五逆・十惡等是なり。何ぞ一業と言はんや。答へて云はく、夫小善・小惡は異なると雖も、法華經の誹謗に於ては善人・惡人・智者・愚者俱に妨げ之無し。是の故に同じく入阿鼻獄と云ふなり。問うて云はく、何を以てか日本国の一切衆生一同に法華誹謗の者と言ふや。答へて云はく、日本国の一切衆生衆多なりと雖も四十五億八万九千六百五十九人には過ぎず。此等の人々貴賤上下の勝劣有りとは雖も、是くの如き人々の憑む所は唯三大師に在り。師とする所は三大師を離るゝこと無し。設ひ余殘の者有りとは雖も信行・善導等が家を出づるべからざるなり。問うて云はく、三大師とは誰人なりや。答へて云はく、弘法・慈覺・智

証の三大師なり。疑つて云はく、此の三大師は何の重科じゅうか有るに依つて日本国の一切衆生を經文の其の人の内に入るゝや。答へて云はく、此の三大師は大小乗持戒の人、面おもてには八万の威儀いぎを備へ或は三千等之を具す。顯密兼学の智者なり。然れば則ち日本国四百余年の間、上一人より下万民に至るまで之を仰ぐこと日月の如く、之を尊むこと世尊の如し。猶徳の高きことは須弥しゅみにも超え智慧の深きことは蒼海そうかいにも過ぐるが如し。但恨むらくは法華經を大日真言に相對して勝劣を判ずる時、或は戲論けろんの法と云ひ、或は第二第三と云ひ、或は教主をば無明の辺域と名づけ、或は行者をば盜人と名づく。彼の大莊嚴しょうごんぶつの末の六百四万億那由他の四衆の如し。各々業因異なりと雖も師の苦岸等くがんの四人と俱に同じく無間地獄に入りぬ。又師子音王仏の末法の無量無辺の弟子等の中に、貴賤の異なり有りししおんのうぶつと雖も同じく勝意が弟子たるが故に、一同に阿鼻大城に墮ちぬ。今の日本国も亦復是くの如し。

去ぬる延暦・弘仁年中に、伝教大師六宗の弟子檀那等を呵責かしゃくする語に云はく「其の師の墮つる所弟子も亦墮つ。弟子の墮つる所檀越だんのつも亦墮つ。金口の明説慎まざるべけんや慎まざるべけんや」等云云。疑つて云はく、汝が分齊ぶんざいに何を以てか三大師を破するや。答へて云はく、予敢へて彼の三大師を破せざるなり。問うて云はく、汝が上の義如何。答へて云はく、月氏より漢土・本朝に渡る所の經論五千七千余卷なり。予粗之を見るに、弘法・慈覺・智証に於ては世間のことは且く之を置く。仏法に入つては謗法第一の人々と申すなり。大乘を誹謗する者は箭を射るよりも早く地獄に墮つるとは如来の金言きんげんなり。將又謗法罪の深重はたまたなることは弘法・慈覺等も一同に定め給ひ畢んぬ。人の語は且く之を置く。釈迦・多宝二仏の金言虚妄こもうならずば、弘法・慈覺・智証に於ては定めて無間大城に入らん。十方分身の諸仏の舌墮落せずば、日本国中の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生、彼の苦岸等の弟子檀那等の如く阿鼻地獄に墮ち、熱鉄ねってつの上に於て仰ぎ臥して九百万億歳、伏臥して九百万億歳、左脇に臥して九百万億歳、右脇に臥して九百万億歳、是くの如く熱鉄の上に在つて三千六百万億歳にして、然して後、此の阿鼻より轉じて他方に生まれて大地獄に有り。無数百千万億那由他歳大苦惱を受けん。彼は小乗經を以て權大乘を破するに罪を受くること是くの如し。況んや今の三大師は未顯真實の經を以て三世の仏陀の本懷の說を破するのみに非ず、剩あまつさへ一切衆生成仏の道を失ふ。深重じんじゅうの罪は過・現・未来の諸仏も争でか之を窮むべけんや。争でか之を救ふべけんや。

法華經の第四に云はく「已すでに説き、今説き、當に説かん。而も其の中に於て此の法華經、最も為れ難信難解なり」と。又云はく「最も其の上に在り」と、並びに藥王の十喻等云云。他經に於ては、華嚴・方等・般若・深密・大雲・密嚴・金光明經等の諸經の中に、經々の勝劣之を説くと雖も、或は小乗經に対して此の經を第一と曰ひ、或は真俗二諦いに対して中道を第一と曰ひ、或は印・真言等に対して第一と為す。此等の說有りと雖も全く已今當の第一に非ざるなり。然るに末の論師・人師等、謬執みょうしゅうの年積もり門徒又

繁多なり。

爰に日蓮彼の依経に無き由を責むるの間、^{いよいよしんに} 彌 瞋恚を懷きて是非を糾明せず。唯大妄語を構へて国主・国人等を^{おうわく} 誑惑し、日蓮を損ぜんと欲す。^{あまた} 衆箇の難を^{こうむ} 蒙らしむるのみに非ず、^{あまつさ} 兩度の流罪 剩^{くび} へ頸の座に及ぶ是なり。此等の大難忍び難き事、^{じょうもく} 不軽の杖木にも^{はたまた} 過ぎ将又勸持の刀杖にも^{とうじょう} 超えたり。又法師品の如くんば、末代に法華を弘通せん者は如来の使ひなり。此の人を^{きょうせん} 軽賤するの輩の罪は、教主积尊を一^{べつじよ} 中劫に蔑如するに過ぎたり等云云。今日本国には^{だいまん ぼらもん} 提婆達多・大慢婆羅門等が如く、無間地獄に墮つべき罪人は、國中三千五百八十七里の間に満つる所の四十五億八万九千六百五十九人の衆生之有り。彼の提婆・大慢等の^{むごく} 無極の重罪を、此の日本国の四十五億八万九千六百五十九人に対せば^{きょうざい} 軽罪の中の軽罪なり。其の理如何。答ふ彼等は悪人たりと雖も全く法華を誹謗する者には非ざるなり。又提婆達多は恒河第二の人、第二は一闡提なり。今の日本国の四十五億八万九千六百五十九人は皆恒河第一の罪人なり。然れば則ち提婆が三逆罪は^{けいもう} 輕毛の如く、日本国の挙ぐる所の人々の重罪は猶大石の如し。定めて梵刹日本国を捨て、^{どうしょうどうみょう} 同生同名も國中の人を離れ、天照太神・八幡大菩薩争でか此の国を守護せん。

去ぬる^{じしやう} 治承等の八十一・二・三・四・五代の五人の大王、頼朝・義時と此の国を御諍ひ有って、天子と民との合戦なり。^{なおよしゆん} 猶鷹駿と^{こんちやう} 金鳥との勝負の如くなれば、天子の頼朝等に勝ること^{ひつじやう} 必定なり、決定なり。然りと雖も五人の大王負け^{おわ} 畢んぬ。^{うさぎ} 兎、師子王に勝ちしなり。負くるのみに非ず、^{あまつさ} 剩 へ或は蒼海に沈み或は島々に放たる。誹謗法華未だ^{ねんさい} 年歳を積まざる時猶以て是くの如し。今度は彼には似るべきにあらず。彼は但國中の災^{ばか} ひ許りなり。其の故に粗之を見るに、^{ちやうじやう} 蒙古の牒状の已前、去ぬる正嘉・文永等の大地震・大彗星の告げに依って再三之を奏すと雖も、国主敢へて信用無し。然而日蓮が^{かんもんほぼぶつ} 勘文粗仏意に叶ふかの故に此の合戦既に^{こうじやう} 興盛なり。此の国の人々、今生には一同に修羅道に墮し、後生には皆阿鼻大城に入らんこと疑ひ無き者なり。

爰に貴辺と日蓮とは師檀の一分なり。然りと雖も有漏の^{うろ} 依身は国主に随ふ故に此の難に値わんと欲するか。^{かんるい} 感涙押さへ難し、何れの代にか対面を遂げんや。唯一心に^{いず} 靈山浄土を^こ 期せらるべきか。設ひ身は此の難に値ふとも心は仏心に同じ。今生には修羅道に交はるとも後生は必ず仏国に^こ 居せん。恐々謹言。

弘安四年 閏 七月一日

日 蓮 花 押

曾谷二郎入道殿御返事